

【発表 NO.7】

実践発表

P4C 実践の試みから見た多文化多言語のこどもと大学生の変容

—複数言語を活用してこどもの「声」を傾聴する活動を通して—

川田麻記（桜美林大学）・上原みなみ（桜美林大学学生）

1. 実践の背景

哲学対話の営みを基盤とする Philosophy for Children（通称 P4C）は、1920 年代にドイツで萌芽し、1970 年代に米国の哲学者 M.リップマンによる省察的教育実践として広まり、世界各地で展開されてきた（河野、2021）。P4C は答えのない問いに対し、こどもたちが対話を通してじっくり考え、自己と世界の見方を深く豊かにしていく言語活動として知られるが、その中でリップマン（2014：196）は「こどもは情動を注意深く扱うことで、自らの生き方を入念に探る」と述べ、その思考のための適切な下地として「情動の語彙の習得」を強調する。その語彙は、一般的に一つの言語が想定されるが、多文化多言語のこどもにとって、それは一つの言語に限定されない。本発表では、多文化多言語のこどもを対象にこどものもつ複数の言語資源を活用して行った P4C の試みについて、実践に参加したこどもと言語教育を学ぶ学生の変容を踏まえ報告する。

2. 実践の目的

文科省（2025）は、多文化多言語のこどもの教育において、こどものもつ複数の言語資源の活用とその言語実践から立ち現れるこどもの思考過程に目を向ける視点を強調する。これは「ことばの力のものさし」（文科省、2025）を支える理論的基盤の一つ「トランスランゲージング（以下、TL）教育論」（ガルシア他、2024）における「TL スタンス」の表れと考えられる。本実践は、TL 教育論に基づき、多文化多言語のこどもと言語教育を学ぶ学生が P4C に TL を活用して取り組むことを通して、以下の①②に示す力や視点を養うことをねらいとした。

- ① こどものバイリンガル・アイデンティティの形成を支援することで好奇心を喚起し、こどもが安心感をもって粘り強く問い続けようとする力を養う。
- ② 学生が TL スタンスを意識化することを通し、こどもの「声」を傾聴するケアの視点を養う。

3. 実践の期間・対象・内容

本実践は 2025 年 5 月～2026 年 1 月までの 8 ヶ月間、全 21 回（オンライン 19 回、対面 2 回）実施した。対象は米国につながる小 2 の A で、2023 年 4 月以降オンラインで学生たちと日本語を学び、2025 年 5 月から P4C に取り組んでいる。A の母語は英語で、包括的なことばの発達ステージは C、日本語習得のステップは〈聞く・話す 4〉〈読む 5〉である。P4C ではウォーリー（2023）の寓話等を取り上げ、日英語で音読し、その内容を基に問いを出して対話を育んだ。

P4C に参加した大学生については、本発表では 4 年生の 3 名に着目する。この 3 名は 3-4 年次（2024-2025 年度）のゼミでガルシア他（2024）の一部を講読し、2025 年度に「ことばの力のものさし」の理論編と実践編の一部を学んでいる。いずれも TL 教育論を学ぶ前（2023 年度）から多文化多言語のこどもの支援に携わっている。

4. 実践の結果：こどもと学生の変容

A は、初めは戸惑う様子も見られたが、徐々に「英語でいい？」と言って英語で考えを述べたり、「〇ってどういう意味？」と日本語でも納得いくまで問い返したりすることが増えていった。例えば、寓話「カエルとサソリ」では「他者を助ける」ことに絡むテーマで問いを立てて対話を

行ったが、日英両言語の活用により、人の性分や責任、助けを求める他者との関係性に至る問いに挑戦できた。具体例として「友達じゃなかったら助けない？」という問いに対しAは「友達、友達じゃない、関係ない。（サソリは）困ってる。困ってるから助ける。」と日本語で力を込めて伝えた。このAの発話には、刺すかもしれないサソリを助ける行為の結果生じる「リスク」と、困っているサソリを助けない「良心」の間で生まれるAの倫理的判断や応答性が現れており、産出された日本語の構造のみでは捉えきれないAの認知的、認識的側面が浮かび上がった。

次に、学生の変容としてUの事例を取り上げる。TL教育論を学ぶ前、Uはこどもの母語を活用できる資源として捉えていなかったという。UはTL教育論を学び「衝撃を受けた」というが、それでも当初は日本語以外を使うことへの懸念があったという。しかしAとの対話の中で、Aが英語を活用することで、物語の詳細や自身の意見を生き生きと語り始める姿を目の当たりにしたことでTLの重要性を実感する。同時に、それまでの支援で自身の関わりが「こどもの力を低くみることにつながっていたリスク」を深く省み、こどもへの今後の関わりを捉え直していった。その過程には、活動を通して徐々に「(TL教育論の)解像度が上がっていく」中で掴めてきた専門性の理解と、こどもの母語が分からないために、うまくTLコリエンテ（流れ）に乗れず「こどもの力を見きれない」と感じるもどかしさが入り混じるジレンマが存在していた。特に、P4Cでは、Aの声を傾聴する中で度々起こる沈黙がAの思考の過程か、それとも言語の壁や参加者の遠慮による間か読み取れず、待つべきか助け舟を出すべきかという瞬間瞬間の判断の難しさへの葛藤も生じていた。最終的に、Uを含む学生たちは、TLスタンスのみではこどもの声は引き出せないという認識に至り、問いの立て方、言語資源の選択のタイミング、沈黙の捉え直しを経て、TLデザイン、TLシフトの技術と経験の積み重ねの必要性へと認識が変容していった。

5. 考察・課題

本実践を通し、TLを活用したP4Cが多文化多言語のこどものバイリンガル・アイデンティティを肯定し、こどもの問い続けようとする力を育むことに寄与することが推察された。また、P4Cの中で立ち上がってくるこどもの認知的・認識的側面については、低学年のこどもの場合も抽象的な事柄の理解を情動の変化と併せて複数言語で見取ろうとすることの意義が示唆された。

学生の直面したジレンマについては、TLに関わる技術と経験の重要性が示された。ただし、そのジレンマは、学生の未熟さゆえの結果とは言い切れない部分もあり、こどもの思考を尊重しようとするがゆえに生じる不確実性の下で営まれるケア的思考の表れとも考察できた。P4Cの中で生まれるケア的思考（リップマン、2014）は、多文化多言語のこどもの公正な教育におけるTLの役割とその教育に携わる人材育成を考える上で今後重要な課題となると考えられる。

【引用文献】

ウォーリー、ピーター（著）永井玲衣ほか（翻訳）（2023）『もし友だちがロボットだったら？ 哲学する教室のつくりかた 30の授業プラン』晶文社。

ガルシア、オフィーリアほか（著）佐野愛子・中島和子（監訳）（2024）『トランスランゲージング・クラスルーム —子どもたちの複数言語を活用した学校教師の実践』明石書店。

河野哲也（2021）『じぶんで考えじぶんで話せるこどもを育てる哲学レッスン 増補版』河出書房

文部科学省（2025）『文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のためのことばの発達と習得のものさし（ことばの力のものさし）実践ガイド』文部科学省総合教育政策局国際教育課。

リップマン、マシュー（著）河野哲也ほか（監訳）（2014）『探求の共同体 考えるための教室』玉川大学出版部。